

---

Students?

O K A

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Students?

### 【コード】

N9939N

### 【作者名】

O K A

### 【あらすじ】

この星空の先に、お前は何を描いてる…？

俺が願うのは、ずっと1つだけ…。

もし、この願いが叶うのなら俺は、…お前に会える。

…でも、いくら願っても…、叶わない。

…あと何回、流れ星に願えばいいんだろうな………

## 残酷な世界

神様は願いを叶えてくれなかった。  
だから俺はこうして漆黒の空を翔<sup>か</sup>る星に願いをかける…。  
今日も綺麗な夜空…だ。

……。

……。

……。

やっぱり今日も叶わなかった。

流れ星が消える間に三回願い事をすれば願いが叶う…。

…ふふっ。

神だけでなく星までもが俺を拒むのか…。

なんて残酷なんだろうな。

…この世界は。

死なせてください。  
死なせてください。  
死なせてください。

毎日迷惑かけて悪いな。

やめようと思っっているんだが、なかなか煙草これはやめられないんだ…。  
白衣が汚れでもしたら大変なのにな…。

よかつたら、お前も吸ってみるか…？

…ははっ、…だよな。

お前は煙草これが嫌いなんだよな…。

実は俺が煙草こけを好きな理由は二つあるんだ。

一つは、お前が嫌がる顔を見れるような気がするから……。  
もう一つは、お前が嫌がる声が聞こえるような気がするから……。  
え？二つとも嫌がらせじゃないかだって？

……ああ。

お前から見える俺はそうなのかもしれない……。

何で俺は生きているんだろう……。

なあ、……教えてくれ。

お前は隣そこにいるんだよな？

ずっと、ずっと、ずっと……。

俺が見えていないだけなんだよな？

見えていないだけ……なんだよな……。

そろそろ時間だ……。

もう行かないといけない。

またお前に会える時を楽しみにしてるから……。

……、語弊だ。……許してくれ。

お前との約束。

そのために俺は、俺たちは……、今、……。

……。

白衣の男が目を覚ましたそこには、目を覚まさない少女がベッドに眠っていた。

「…君主、起きたか。」



白衣を脱ぎ、病院から出たその男が見た世界には  
神も星もなく  
ただ美しい海と空が映るのだった

## 残酷な世界（後書き）

前作「Students」の続編となっております。

「Students」を未拝読の方はお手数ですが「Students」のトップページの右上端にある作者：OKAをクリックして頂ければご覧になりますのでよろしく願います。

1：部屋に在るモノ

男は1人部屋にいた

その空間は他の存在を拒み遮る箱庭

そして、刻一刻迫りくる負の誘いが

彼の全てを狂わせていく

今一度目覚めたとき、思いを埋葬できないまま

――目を覚ますとそこは、暗闇だった。

腐臭がする。

臭いのする方向へ腕を模索する。

自身の指先が感じ取る要素。

丸い容器、軽い、中に何かが…在る。

自身の脳内で昨晚の食事の記憶を振り返る。

……。

音がする。

おそらく、門前を通る学生の声だ。

男の子の声と女の子の声。

元気がいい。

これぐらい明るければ、自分のいる場所にも聴こえるのか。  
楽しそうだ…。

変化の無い眼前の景色。

絶えず瞬きを繰り返す。

今感じているモノは本当なのか？

…。

肯定するしか選択肢はない。

日々、重みを増していく身体を休ませる場所は、ここしかない。

… 光の差し込まない場所。

窓という外の世界を観れるモノの存在は部屋の至るところに点在するが、無いに等しい。

自分は全く、窓を開けなくなった。

過去は毎日、空けていた記憶が… 在る。

思考には限界が在る。

光が無ければ全てを疑うざるをえない。

嗅覚、触覚、聴覚。

そして視覚…。

これらの感じるモノは絶対的なはず…。  
だが自分がある場所へやは、どうだろうか。

明かりを点せば問題とは解決する。

自分の感覚を全て鵜呑みうのにし、満足できる。

そして、更なる欲求を求めるとが如く邁進まいしんする。

…正しい。

恐らく、これが普通の人間だ。

しかし、どうやら自分は違うらしい。

他の人間みんなとは違うらしい…。

自分の感じるモノが違うのか？

感じている自分が違うのか…？

…、…。

疲れている。

連日、不眠の生活。

思い浮かぶのは卑屈たわじとな戯言。

こうしている間にも…。

…救えない命が確実に、消えていく……………。

自分がこのまま生き続けると、消える…。  
自分がこのまま消えても、消える…。  
どちらを選んでも変わらない。  
光が差し込もうが  
暗闇のままだろうが  
全く、関係ない…。

何か理由いいわけが欲しい。  
慰め、慈しみ、優しさ…。  
こつこつ温かさでもいい。  
とにかく自分が少しでも楽になればいい。  
どちらにせよ結局、起こりえることは一つしかないのだから…。

あとどれくらいだろうか。  
この葛藤が続くのは…。  
意味のない時間を潰すだけの悪あがき。  
時間が止まるうが、戻ろうが、進もうが…。  
自分は、受け止めるしか出来ない…。

代わりになればいい…。  
自分の身体が、記憶が、心が。  
消えうせてしまえばいいのに…。  
そうすれば…。  
救えない命なんか…。  
……………。

自分は見つけられない…。

答えを教えて欲しい。

…いや。

答えはあるのだろうか…。

教えて欲しい。

自分は他の人間みんなとは違う。

だから、わからないのだろう。

どうすればまともな人間として在ることができるのだろうか…。

なんでもする。

だから、お願いだ…。

…そうか。

誰も話を聞いてくれないのか。

いいよ、自分も実はそれを望んでいたんだ。

他の人間みんながそうできてくれたほうが自分は…。

…。

でも、一つだけ言わせてくれ。

自分はこれだけは伝えておきたい。

俺と。

他の人間みんなも同じこの…。

…部屋せかいにいるということ。

――瞳を閉じてもそこは、暗闇だった。

.....。

男は再び眠れない眠りにつこうとした

しかし…

自分の身体の影を久々に確認する

頭上から部屋を照らす照明

そして自分以外の人間の姿が、眼前にあった

## 2：自分淘汰

男は無言のまま、部屋を片づける人間かのじよを見ていた。

ここまで他の人間の部屋を片づける人間かのじよは珍しい。  
何か報酬が出れば別だ。  
しかし、奉仕の精神でここまでの働きよう。  
…違う。

自分が部屋なわばりを管理できていないから代わりにしている…。

…？

人間かのじょはいつたい何が目的だ？

自らの労力が生み出すのは、他人に対する無価値な行い。  
それを知らないフリをしているとでも言うのか…？

自分はこうしてただ怠けて床に座っているだけなのに…？  
なぜ、そんな自信に溢れているんだ？

部屋こほには何も無いぞ。

見てのとおり汚れていて、歩きにくいところだ。

それなのになぜ…。

人間かのじょは動き続けるんだ？

…。

迂闊こつだった…。

鍵を閉め続け、もう部屋こほで…。

…そう？

確かそうした…。

記憶にも鮮明に残っている…。

自分が最後に外の世界から帰ってきたとき、  
確実にそう誓ったこと  
を。

…、…。

…奇妙だ。

…気持ち悪い。

…離れてくれ。

自分にはもう何も必要ないんだ。

…だから。

1人にさせてくれ…。

「起こしてしまつてすみませんね……。  
君主くん家に来て早々、騒がしいですよね……………。  
でも、なーちゃんから……。  
……長原先生から合鍵を預かっておいて正解でした。」

人間の言葉には耳を貸さないことにしよう。  
それが賢明だ。

何か企んでいるに違いない…。

俺の名前を気安く呼び、期待を込めた瞳をし、傍に近づく。  
人間は何も恐れていない…。

俺の存在を無視をするかの如く、凶々しく目の前にいる。  
用意周到を示したいいのか？

エプロンをし、掃除機をかけ、窓を開き換気をする。  
ふざけている…。

…どこまで俺の部屋を壊せば気が済むんだ？

誤解するな。

他の人間に、自らの定義を押し付けても通用しない。

…いいや。

俺と他の人間は違う存在…。

こう言えば理解できるだろう？

本当に何も聞いてくれないんだな…。

…もう一度言う。

自分と彼女は違う。

…、  
…  
いい加減、部屋から出て行ってくれ…。

「みんな心配していましたよ…。

長原先生、白井先生、島田先生…。

そして、私も…。

…憂鬱だ。

幾度となくこういう体験をしてきた。

口では何とでも言える…。

彼女きみもそうなのだろう？

根拠の無い偽りほど悲しいものは無い…。

同情を装い、同感を演じ、同体になろうと試みる。

自分おれも、…わかる。

…以前、他の人間みんなを真似ていたから。

彼女きみが今、自分おれで遊ぶように…。

……。

今までの自分<sup>おれ</sup>なら付き合っ<sup>て</sup>あげていた。

…でも、もうやめた。

そんなことをしても何も変わらない。

全て自己満足。

他の存在を満たすことなど出来ない。

仮面をつけたまま過ごすしか方法は無い…。

彼女<sup>きみ</sup>も知っているはずだ。

自らの想いが強いほど…。

自らが望まない世界になった時に…。

…全てが痛むということ。

「…、私は知ってます。  
君主くんは捨てられませんよ。  
身体も、記憶も、心も…。」

「そうだ俺じぶんを責める。  
もっと俺じぶんを罵れ。  
…そして俺じぶんを傷つけるんだ。」

楽しいか？  
嬉しいか？  
満足か？

それで彼女の存在は確立される。

だから彼女が喜び自分は淘汰される。

つまり彼女は自分を消してくれる…。

自分も彼女みたな人間だったらよかった。

彼女みたいな…。

…道化師に。

「…箱これがある限り。  
みんなが大好きな君主くんです……………」

彼女は部屋の中から見つけ出したその小さな青い箱を、笑い狂うその男に差し出した。



### 3：まだ翼があるなら

紺碧なその空はただ静かに息吹し、広がり続ける  
変わり無いその色を羨ましく見上げる一羽の小鳥  
冷たい大地にその小さな身体を預けたまま佇んでいた

小鳥は足下を見つめ、翼を広げ、叫んだ  
親を亡くし、仲間と逸れ、飛ぶ行方がない  
幼い嘴で自ら二枚の翼を切り断とうとした

その時、風が吹いた  
空を、大地を、そして翼を  
全てを限りない途方の彼方へと誘う

小鳥は再び空を見上げた  
そこには一枚の白い羽が漂う  
それを自らのものと知らず、小鳥は無邪気に飛び立つ

「…もう、あの子が姿を消してから数え切れない時間が経ちました。私たちがあの子と交わした約束…。その揺るぎない希望が今、私たちを動かしています。」

…そう、その約束が今、俺おれを傷つけている。

「あの約束の後、私たちの全てが壊されました。今でも夢の中に映りこんできますよ…。何度も何度も、あの時の光景が蘇り、苦しめられています。」

幸せが溢れていたのに何も気づけず、…失った。

「…でも、私は信じてます。

君主くんも信じてますよね？

その証が、この箱の中なのですから…。

…この背中にまだ翼があるなら、俺は追つい続つけたい。

「必ず、あの子は帰ってきます。  
…そして私たちが高校生こどもだった頃と同じように。  
また笑顔で微笑んでくれます。」

またみんなと一緒に  
…アイツと一緒に  
笑いあえる場所を求めて…。

窮屈な部屋の中で男は少し微笑み、窓越しに映る一羽の美しい鳥を見つめていた。

## 丸く大きな輝き

…どうしたらなれるんだ？

そう一心に空の彼方に問いかけても

丸く大きな輝きはただ黙々と世界を包み続ける

部屋の中でも、玄関の前でも、俺の瞳の中でも

…等しく、強く、温かい

光に満ち溢れ何もかもを照らし出す

俺はこの輝きが大好きだった

でも今は憎い

いつも俺は傍にいるのに、お前は俺のことを知らない

俺はお前の悪いクセを知っている

それは俺が悲しみに堕ちている時でも

俺の本当の気持ちを知らないで、ただ、優しく傍そばで微笑み続けていることだ

俺は嘘つきで、臆病で、最低だ。  
でも、そんな俺もお前みたいになれたらなって  
…思うんだ。

家を出た俺は無意識のうちにズボンのポケットから煙草を出して  
いた。  
なぜか勝手に脚が動き続けている。  
どこに向かっていいのかを自問自答しているうちに一本を軽々吸い  
終わる。  
その繰り返し。

脳裏に浮かぶ病室の映像。

そこにはベッドで眠り続けたままの人形のような女の子と、必死にその女の子を起こす術すべを探す白衣の男がいる。

その女の子は全身打撲、脳挫傷、意識不明の重体。

雨の日に操作を誤った車に追突され起こった惨事。

誰あいつが悪い、誰あいつを裁け、誰あいつを…

…ふざけている。

一番大切なことは、何なんだよ…

結局、関係のない人間は現実逃避して都合のいいことを言い、やがて忘れていく

意識不明の女の子のことを、家族の想いを、友達の気持ちを…

同じ世界にいるはずなのに、何も知らないままに。

ふと足下あしもとを見ると、地面アスファルトには誰かが捨てた空き缶と自らが落とした煙草の灰が散らかっていた。

…皮肉。

わざと土踏まずを空き缶の上に乗せ、体重を掛け、無残に踏み潰す。気づくと片づけるどころか自分は道端に蹴り飛ばしていた。

甲高い音が立ち並ぶ家々の壁に反射し、増幅し、消える。

…八つ当たり。

再び足下をみると、煙草の灰だけが図々しく残されていた。

自分の苛立ちが消え、目障りな空き缶も消えたが、病室の映像は消えない。

…俺がこんなことをしている間も

女の子を助けるために努力している男ひとがいる。

…俺に出来ること。

それは医師として命を救うこと

そして、自分の全てを賭けること

右手には何本目か把握していない煙草が、左手には大量の煙草で溢れかえった携帯用灰皿が。

いつの間にか商店街まで来てしまっていた自分は、その滑稽こっけいな姿を立ち並ぶ店のガラスで確認した。

周りの人間の視線を気にせずおひきずに踵を返す。

すれ違う度に向けられる鋭く陰鬱な視線の多さから今日は休日だったことを思い出す。

確かに、この灰皿から飛び出した煙草の多さを見れば変な風に見ら

れてもおかしくない。

…でも、そんな見られ方を許せない自分がある。

何を考え、何を想い、何をしようとしているのか？

…決まっている。

俺は女の子1人を助けたいだけだ。

歩いてきた道を戻れば戻るほど俺は期待していく。

いったいどれだけの人間が俺の中の本当の姿を見てくれているのかを。

無表情で煙草を吸う通りすがりの人間が世界にどう映るのかを…。

女の子の容態は植物状態。

彼女自身で呼吸すること自体、危うい状態。

大脳、小脳、脳幹に損傷がありすぎる…。

残された選択肢は電気刺激による脳幹の活性化…。

…だめだ、電気刺激治療は金額が掛かり過ぎる。

……………。

……どうすればいい

確実に助ける方法なんてどこにも……

……

……

……、

……ないんだよ……

海岸沿いにある公園内のベンチで泣く男に人間かのじょは声を掛ける。

「隣りに座るよ、  
……君主くん……。」

「わたしね、いつも走る時はここで休憩するんだ……。  
ずっと走り続けると見えなくなっちゃうものもあるからね……。」

「……顔を上げて……君主くん  
こつすれば、あの輝きが涙を消してくれるから……。」

「……、……。」

彼女もまた自らの涙を抑えるために男と一緒に

空の彼方で輝く太陽を見つめる

ジャージ姿のその人間かのじよは涙を流す男に優しく微笑んでいた

#### 4：噴水の碎ける音の中で

青いジャージ姿のその彼女は目の前の噴水を見ていた

延々と絶えず水の碎ける音が創りだされる

その一瞬の隙間を埋めるかのように、彼女は瞳を預けたままだった  
彼女の隣りに座る男は

地面へ零れ落ちる水の音の中から小さすぎる彼女の言葉を拾う

それは彼女が高校受験を控えた頃の話だった。

少女は塾かのじょからの帰宅途中、受験の対策、覚えきれない量の勉強…  
家を出たのは昼だったのに、もう辺りは既に真っ暗。

学校に行つて、毎日塾に通つて、出された宿題を勉強して…  
そんな退屈な生活をしていた。

もちろん、たまに気晴らしに友達と遊んでいたらしい。

お互いの家に行って話をしたり、街に出かけたり、買い物をしたり…  
楽しいと思えることもしていた…。

…けれど。

少女の胸の奥底は沈んでいた…。

つまらない勉強のせいか…、進路の不安か…、変わらない繰り返し  
の日々が原因か…。

どれも当てはまり、気分が晴れない原因だと少女は理解した。  
高校生になって具体的な夢や目標ができれば解消される…。

そう少女は信じ、退屈な生活を過ごし続けたという。

やがて、どうでもいい勉強の成果が実り、少女は進学した。

…だが、少女を迎えたのは以前と変わらない気持ちだった。  
解消されるどころか失速していく胸奥の感情。

自分に何が必要で足らないのか？

悩んでも悩んでも分からなくて、苦しくて、痛みに心が蝕み尽くさ  
れそうになったその時。

……少女に声をかけた女の子がいた…。

少女はすぐさま女の子から指摘されたという。

どうして公園で、1人で、泣いているのか？と…。

その女の子は辺りを見回して不思議な顔つきで、でも優しい笑顔で

…。

少女が泣いていたのを誤魔化してくれたという。

そして、少女はやっと自分が学校帰りの夜の公園で泣いていることに気づいた。

目の前にある噴水。

椅子に腰を掛ける少女と女の子。

話をするうちに2人とも同じ高校の、同じクラスの、同じ窓側の列に座っていることがわかった。

すぐに打ち解けあい、盛り上がり、声を高く張り上げる…。

…そして、少女と女の子は「親友」になった。

まだ知り合っただけにもかかわらず、少女は「親友」に質問してみた。

原因不明の沈んだ心を治す方法を…。

…すると。

女の子はその質問を聞くなり、すぐさまどこかへ走って行ってしまった。

制服姿の少女が夜の寒さに堪えきれなくなりそうになったその時、女の子は戻ってきた。

女の子の手には紙袋が掲げられていた。

そしてその中には「青いジャージ」が入っていた。

嬉しそうに笑う女の子。

なぜ、女の子がそんなに嬉しそうなのか分からないまま少女は…。  
女の子とお揃いの「青いジャージ」に着替えた。

少女は女の子に手を引かれたまま走り出していた。  
鞆の重さなど気にも留めず、ただひたすらに走る。  
すごい速さで街の中を通り過ぎていく…。

神社で御参りしたり、電飾が綺麗な建物を見物したり、駅前のおいしいお菓子を食べたり…  
とにかく街の思いつく場所全てを制覇したのだった。

息を切らせ、疲れ果てた少女と女の子は再び公園へ戻り、椅子に腰を掛ける。

すると、女の子は唐突に少女に質問したという。  
「どうだった？」と…。  
その質問に少女が一言「疲れた…。」と答えると  
女の子は口が裂けるほど笑ったという。

少女は意味がわからなかった。

これが原因不明の沈んだ心を治す方法なのか…？

でも、確かに少女の心の沈みはすっかり消えていた。

街中を全速力で制覇して疲れることが沈んだ心を治したのだと…。

そう少女は受け止めようとした。

…違う。

少女の心には何かが芽生えていた。

喜びでもない、嬉しさでもない、疲れによる困憊感でもない…。

感情で分類される気持ちではない…。

それよりも、もっと強く、優しい何か…だった。

それが少女の最初で最後の体験だったという。

部活でもないのにジャージを着て、練習でもないのに街中を全速力で走って…

走ることが大好きな少女でも、そんなことは思いもつかず、立ち止まっていた。

…でも、息が切れるほど走ると、心の沈みがいつの間にか消えていた。  
それを導いてくれた「親友」の存在…

高校で陸上部に所属した少女は何度も試してみた。

「親友」と初めて公園で声を交わした日のことを思い出しながら走る。

自分が落ち込んでいた頃のことを思い出しながら…。

…でも。  
いくら試しても「親友」と一緒に街を駆け抜けたようには走れなかった。

やがて少女は大人になり、気づいたという。

泣いていることすら分からなかった自分に、ある「何か」を気づかせてくれたあの日。

夜の暗い公園で泣く私を見つけくれた優しい笑顔の女の子。

きつと、私のことを想い、一生懸命になってくれたから…。

私が見えてなかった世界を、いつもの変わりのない世界を、感じる  
ことができた…。

だから、噴水を見る度に蘇るのだという。

公園で待っていていればまた…。

同じように変えてくれるのだろうと。

沈んだ心をその笑顔で誤魔化してくれる…。

…優しい「親友」が迎えに来てくれるのだと。

交差する太陽と雲

その狭間から漏れた微かな光が噴水の下にできた水面を照らす

幾度に揺らされながらもその水面に映る2人は

自らの姿を見ないように噴水の水が砕け続ける音だけを聞いていた

ただ、誰かの声を求めているかのように…

## 5：茜色の射す公園

夕暮れに傾く園内に旋律が流れ始める

それは疲れ果てるまで遊んだ子供たちを優しく包み、親のもとへ導く  
潮風とともに去り行く無邪気なその笑顔たちは帰る場所を求め、走り抜けていく

そして、その少女も走り出そうとしていた

しかし少女の脚は脆く、砂利粒の地面へと転んでしまった  
周りを見渡すと自分の影だけが虚しく夕日の広場に残る  
目尻にある濡れた感触を堪え立ち上がるうとするが、膝に激痛が走る  
流れる赤い血はただ、取り残された少女を見つめる

その時、1人の少年が少女の前に現われた

少女と同じほどの背丈のその少年は近くにある水道から手受けて水を少女の膝の上へ運ぶ

不器用なその小さな手から水は零れ、殆どは砂利粒の上へと消えていく

そして、濡れたその手のひらで少年は、少女の手のひらを優しく引き寄せる

無言で優しく歩く少年と、濡れた膝に少しの痛みを堪えながら歩く少女

響き渡る旋律と共に彼らは少しづつ歩いていく

2人の進む方向には茜色の線と

温かな夕日が見えている

「私もよく公園こうえんで遊んだんだよね…  
走り回っては転んで、泣いて、怪我をして……………」。

…アイツも公園こうえんでよく転んでいた。

「でも、決まって帰る時間になると…、  
旋律これが流れるんだよね…」

もうアイツは忘れてしまっているかもだけど、俺は覚えてる…。

「…この旋律って、あの子が歌ってた歌と似てるんだよね……………」  
君主くんもそう思うっ…よね？」

公園は俺が初めてアイツと出会った場所、そして…

「私たちも帰ろうか…」  
…、君主くん何処に行くの……………？」

俺が白衣を着る理由になった場所…。

煙草を銜<sup>くわ</sup>えた男はジャージ姿の彼女を残し、茜色の方向へゆっくりと歩き始める。

## 慈悲の無い月の微笑み

深みを増す夜の校門

花を咲かせず寂しく佇む桜

誰もいない下駄箱

冷気が制す闇の廊下

曖昧な足取りで階段を上り続ける

保健室、職員室、そして

かつて自分達がいた教室へと辿りつく

扉を開ける懐かしい感触

広がる世界

机、黒板、掃除用具入れ

そして

…<sup>むかし</sup>高校生からの「親友」

窓越しから差し込む陰鬱な明かり

その僅かな灯火は俺たち2人に問いかける

俺達が過ごしてきた日々を弄ぶように

その慈悲の無い月の微笑みは深々と朝を拒み続ける

俺は教室の窓側の列の一番後ろの右側の席に座る  
親友は同じく窓側の列の俺の座る席の左斜め前に座る  
そして互いに少しはにかみながら口を開く

「君主は今日、どうして高校（こうこう）に来たの？  
私から連絡してないのにここに来るなんて…。」

「…わからない。」

「…?」

「さっきまで公園で白井と話していたのに気づいたらここに来た。夕暮れが堕ちて月が出てる。」

「そんな断片的なことしか考えなかったな…。」

「私も大体そんな感じ…」

「でも、なんとなく君主に会えるような気がした…。」

「…不思議だよな。」

「約束もしていないのに会うなんて…。」

「きつと、あの子が導いてくれたんでしょ…。」

「……………、違ういな。」

俺と親友は視線を一つに重ね、同じ場所を見つめた

窓側の列の一番後ろの左側の席

俺の席の隣りの場所を、親友の席の後ろの場所を見つめた

「君主、もう大丈夫なの？」

「…ああ、まあな」

「前にも高校の屋上で話し合ったわね…」

「あの時は悪かったな…、急に昔のことが…。」

「昔…か。」

「そんなに私達は歳を重ねていないのにね…」

「きっと深層心理がはたらいているんだよ…」

「思い出したくないものほど知らないうちに忘れていく…。」

「でも、私と君主は今こうして再び教室で出会った。」

「忘れたくても、忘れられない思いを抱えたまま…」

「…気づいたんだ。」

「……………？」

「消したくても消えない思い出がある。」

「でも、それはたとえ最悪な記憶だとしても紛れもない…」

「…俺たちが過ごした日々なんだ。」  
「……………」

俺は席を離れ窓越しの月を眺めたまま親友かのじよを見ないように話す  
これを話したら親友かのじよは恐らく壊れてしまう  
でも乗り越えなければならぬ

「安心した…。」

君主がまた前みたいな状態だったら園歌を助けたくても助けられないんじゃないかな……。」

「…助けられない。」

「……………」

「…完全には助からない。」

目を覚ましても言葉を話せず、体が動かせず、今までの記憶も消えているかもしれない……。」

「……………、どういう…意味?。」

かのじょ

「園歌は脳に損傷を受けすぎている。」

体の細胞組織と違って、脳細胞は一度損傷すると回復することは無い……。」

「……………君主、うそよね?。」

「…嘘なのよね???。」

「そんな冗談は…嘘なの……………よ…、ね??????。」

「……………受け止める。」

「これが俺たちがいる世界なんだよ。」

静寂の教室に椅子が勢いよく倒れる音が鳴り響く  
親友は俺の胸座むなぐらを取り、怒鳴り散らす  
涙の混じるその悲しい顔が、俺の無表情を装う瞳を襲う

「……………、どうするのよ……………」  
それじゃ私達と同じ気持ちで、想いを、苦しみを時見たちに……！

他の子たちにも受け止めるって言うの！……！？」

「俺も長原おまえと同じ意見だよ。」

でも俺たちが望んだほど、この世界は…優しくないんだ。」

「何をふざけたことを言ってるの！……！！！」

何かあるでしょう？何であきらめてるの！？何を根拠にしているの！……！

どうしてそんなに落ち着いて人の命をあきらめてるの！……！？」

「命は助かる…。」

脳の運動野と言語野の損傷量の結果を述べているだけだ……。」

「……どうしちゃった…の？」

君主はもつと何とかできるはずなのにどうして……！！……！！おかしいよ……！！？」

これじゃあの子との約束も守れないよ……！！……！！？」

「……アイツとの約束は必ず守る。」

「ねえ……！！ねえ……！！？なんでなのよ……！！……！！……！！なんでもつと頑張らないの？努力しないの？？試さないの？？？」

…本当は助かるのよね……！！？」

これはあくまで最悪の結果であって別に絶対的に園歌の心身が束縛されるわけじゃ……。」

「……いい加減に黙れ。」

…長原……。」

床に崩れ落ちる親友かのじよ

いつもの強気な様子はなく、体を丸め、息を吐き出し続ける  
駄々を捏ねる子供のような親友かのじよの姿を見るのは初めてだった

「俺も本当は泣きたいけどな…

ここで泣いたら……………」

前と同じなんだよ、…長原。  
「

俺は親友かのしよを抱きよせていた  
自分を慰めているのか、親友かのしよを慰めているのか  
…わからないほど強く。

## 6：夜風に掠められて

俺は泣きつかれた親友かのじよの腕を引き寄せる  
窓越しの月はいつの間にか雲に隠れていた  
静寂と沈黙と暗闇  
手探りで無慈悲な教室くわかんの中から扉をさがす

…そして、ただ夜風だけを求めて。屋上へ向かう。

「俺たちが屋上で飛ばした紙飛行機は今頃…、どこにあると思う…？」

「海を越え続け、空高く舞い続け、今も飛び続けている…。」

「…そう私は願いたい。」

「でも、世界は、…違う。」

「海の底に沈んで、翼は…消えている。」

「…高校生の私たちの希望は…消えている。」

「そう…言いたいよね。」

「希望なんか俺たちには最初からなかった。」

「あつたのは、ただ残酷な…世界だけだ。」

「……………、…。」

「高校生の俺たちの幸せはもう消えた。」

「見えているこの水平線は、俺たちの存在を拒んだ…。」

「…、…。」

「でも、俺たちはこうして、…屋上にいる。」

「希望のない世界に、拒まれた存在の俺たちが…だ。」

「……………。」

「なんでだろうな？」

なんで俺たちはここにいるんだ？

長原はどう思う…？」

「…わからない。」

「…、……………？」

「…君主が、何を言いたいのかわからない！！！！

私は理解できない…。

…自分<sup>わたし</sup>はもう、何も聞きたくない……………。」

「…長原。

ここでアイツと約束した日のことを覚えているか…？」

「あの子の誕生日…。」

「ちょうどクリスマス・イブの日…。」

「…そう。

「俺たちはアイツの誕生日を祝うために屋上<sup>こゝ</sup>に集まっていた。」

「…そして、『赤い雪』が降ってしまった。

「誰もあんな日が訪れるなんて思わなかった…。」

「消えたアイツの記憶<sup>すかた</sup>だけが屋上<sup>こゝ</sup>に…残った。」

「あの子は、私たちとの約束だけを残して…消えてしまった。」

「屋上（11）に來るとアイツに…會える。  
でも、それは幻想（12）だ。」  
「…あの子の存在は…無い。  
そう…、言いたいの…？」  
「…いいや、逆だ。」  
「…………、…？」  
「俺はやっと気づけた…。  
本当のアイツと會える…方法を。」  
「…、本当のあの子…………。」

再び姿を現した月は夜風に問いかける

冷たいその息吹を羨んで

夜風は世界に佇む彼等の頬を優しく掠めて答えた  
月の微笑みが世界を照らしたからだ

屋上の彼等は静かに満ちた月を見つめる…。

## 7：ゆるぎないモノ

……。

…そう。

届かせればいい…。

ただ腕を伸ばせばいいんだ。

…躊躇ためらうことなんか無い。

宇宙そら彼方に届くわけがないだろう？

…わかっている。

それでも俺は届かせて見せる…。

いま俺と世界おまえは…感じている。

俺は世界おまえの遠い存在を。

世界おまえは俺の無力さを。

…でも俺は超える。

背伸びをして、歯を食いしばって、顔を赤くして…。

馬鹿だつて何だつていい…。

俺には、俺たちには世界おまえに無いものを持っている。

世界おまえが知らない…ゆるぎないモノを。

「今まで俺たちは希望にすがりつき、世界を受けいれていなかった。傷ついた自分を見るのが恐くて、悲しんだ互いの姿を見るのが嫌だった…。」

「…、……………」  
「でも、傷ついて悲しまないと超えられないんだよ…。」

「本当のアイツに会うには…な。」

「…、……………」  
「間違ってたんだ。」

「デタラメな希望よりも、ふざけた世界よりも、…大切なモノがある。」

「……………」

「俺たちとアイツの『約束』…。」  
「これだけはどんなものより…大切だ。」  
「君主……………」  
「だから、もう俺は進むぞ。」  
「、どこに行くの……………」  
「病室だ。」  
「……………」

「…最後に一ついいか？長原…。」  
「…ええ。」  
「園歌ちゃんに、アイツの首飾りを渡したんだよな…？」  
「……………ええ。」  
「…やっぱり、長原おまえも俺と同じ事を想っていたんだな…。」  
「…私も……………、そうかも知らない…わね…。」

「…綺麗だな。」

夜風はもう消えたな…。」

「…そうね。」

「…っ、ああ〜っ〜っ！〜！」

「そんなに背骨が鳴るなんてよっぽど緊張してたのね…。」

「…かも…な。」

「じゃ、俺は行くぞ…。」

「…待って！」

「私も伸ばしてみるわ…。」

親友<sup>かのじよ</sup>も届きもしない月に向けて腕を伸ばしていた  
いつぱいに伸ばされたその両腕の間から  
輝く月にいつまでも瞳を預ける彼女が見えた

## 二つの白衣

休憩室には俺と同じ白衣ふくを着た男

脚を組み、飲みかけのコーヒーをゆっくりと飲み干していく

混ざりのない、黒い水面ひつりめん

そこに映る俺を確認すると、微笑し、男は一気にコーヒーを飲み干した

「…君主、帰ってくるのが遅かったな…。」  
「…ああ、寄り道をして、ちよつとな…。」  
「煙草を吸うんなら屋上でしてこいよ…。」  
「俺たちしかないといつてもここは…病院、だからな…。」  
「…いいや、煙草はもう大丈夫だ。  
俺もコーヒー、淹れてくれるか…?」  
「……………ふふつ。  
あいにくミルクとシロップは切れているが、…それでもいいか?」  
「…ああ。  
試してみるよ…。」

「だからバレンタインは地獄だったな。なんでチョコとかクッキー  
…なんだろうな?」  
「…それは自慢か、つて…、まさか最初から休憩室こいにミルクとシロ  
ップは置いてなかったのか!？」  
「…だって、休憩室こいでブラック飲むの俺ぐらいしかないんだよ!  
…!」  
「だから俺は高校しほくからコーヒーミルクを持ってきて、お店さながらの  
味をだね……………」



「白鳥と、もう1人、時見がいる……。」

他の子たちには、まだこの結果は伝えていない……。」

「……、……ああ。」

「俺が2人に声を掛けても、……ダメなんだ。」

「でも、君主なら……、必ず……。」

「なあ、島田……。」

「……、……？」

「……落ち着いたら、……みんなが笑えるようになったら……、」

「……一緒にミルクコーヒー、飲もうな……。」

俺は立ち上がり、病室に向かう  
空っぽの紙コップを強く握り締め、男は俺に言ってくれた  
そして、俺は胸元の黒い染みを、力強く、舐めた

## 8：君と同じモノ

俺の目の前には彼らがいる

園歌ちゃんと時見くん…

残酷な世界

全てが止まっている

時見くんは園歌ちゃんに声を掛け続けている

だが、園歌ちゃんの返事は無い

返事をする事ができない

言葉を話す事ができない

体にも麻痺がある

脚も、腕も…

動かす事ができない

かろうじて首を横に振り続ける

園歌ちゃんはただ静かに首を横に振り続けるだけ

時見くんがどんなに想いを伝えようとしても

ただ…

園歌ちゃんは首を横に振り続けるだけ

「君主先生……、俺は何か悪いことをしたんですかね……」

「……。」

「君主先生……、俺は何か罰を受けるべきなんですかね……」

「……。」

「……、君主先生……、俺は何か勘違いしてたんですかね……」

「……。」

「俺は何か……、……。」

「……。」

「……。」

「俺はいつたい、いつまで痛み続けたらいいんですか……？」

「……。」

「……、幸せは……どこにあるんですか……？」



「時見くんが被災した日のこと…、覚えているよね…。」  
「その時に俺は君を施設所で見つけた…。」

「君の心の喪失きおくを戻すために俺は、約束をした…。」

「あの時に話した話…、実は続きがあるんだ…。」

「時見くんに伝えられなかった…、

…本当の世界が…。」

これはアイツがいなくなった時の話  
…そう  
アイツが…、死んだ記憶………

## 9 : 壊れた世界と君との約束

.....  
.....

俺が高校3年生の時のクリスマス・イブに、アイツは死んだ。  
街を襲った地震は火災を起こし、『赤い雪』が降り続いていた。  
少し前の幸せな時間は消えていた。  
俺の瞳に映っていたのは、死んだ人と、死んだ希望と、死んだ大切

なモノだった。

高校の屋上は安全で被害は少なかった。

…そう、俺たちが生き残り、アイツは死んだ。

俺たちにアイツはある約束をして、存在を捨てた…。

一緒だった時間も、幸せも、想いも…

アイツの誕生日を祝うために集まっていたのに…。

どうしてこんなことになってしまったのだろうか…

…そうだ、夢を見ているんだ

…こんな現実なわけがない…

翌日、眠りから覚めた俺たちは再び高校の屋上に立っていた。

壊れすぎた街を癒やす方法は見当たらない。

俺たちは紙飛行機を飛ばしていた…

…叶いもしないアイツの笑顔を求めて。

数日後、俺はボランティアで傷ついた人たちを看病していた。  
避難所、倒壊した家、施設所…  
みんな泣いていた…。  
…笑顔なんてどこにもなかった。

これからどうなるんだろう…。  
また世界は俺に…、俺たちに何かを与えるのか…  
アイツを奪った世界は、今度は何を…  
……。

手当てをする患者の顔からは涙が流れ続いていた。  
それは全身の火傷を負った皮膚に浸透し、新たな痛みを創っていた。  
俺は自分の涙を必死に堪えながら患者の身体を消毒した。  
…でも数日後、その患者も死んだ…。

涙を流すことが悲しみなのか…？  
人の死を受け入れることが俺を強くするのか…？  
俺が弱かったからアイツを守れなかったのか…？  
……、…教えてくれ。

施設所に戻った俺の目の前には新たな患者が椅子に座っていた。

……。

その男の子は、俺が過ごしてきた記憶に刻まれている……。

…俺とアイツと、この子と、…もう1人の女の子…

俺は男の子に質問する。

しかし、男の子は首を横に振るだけだった。

俺とアイツと、この子と、もう1人の女の子で遊んだ記憶は完全に消えていた…。

この子の中のアイツも…、消えてしまっていた。

黒髪の長い人だよ…。

歌が上手な人だよ…。

首飾りをしてる人だよ…。

…俺が好きだった人…だよ…。

俺は君の事を知っているよ…。

…君は、あの女の子が好きなんだよね…。

俺も君と同じくらいアイツのことが…

……。

アイツは消えてしまった…。

…でも君と俺のこの想いは、壊れた世界こゝろにある。  
だから、一緒にこれから頑張ろうね。

…約束しようね。

君も自分の心の中でいいから、…何か一つ、俺に約束してくれるかな…。

…うん。

いい約束だね…。

…なんで約束をするのかって…？

…それはね、俺の好きだった人が最後に笑って約束してくれたからなんだ…。

…なんて約束したの…って…？

…それは秘密…だよ。

…さあ、そろそろ俺は行かないとなんだ。

君は…、そっか…。

…でも、また会えるよね…。

…最後に…、一緒に海に行こうか…。

⋮  
○  
⋮

「……………先生、俺忘れていました…。」

「…先生が俺を助けてくれたということしか…覚えていませんでした…。」

「俺がアイツの死について話したのは、今が初めてなんだ…。」

「時見くん…、園歌ちゃんは今も…、君の目の前にいる…。」

「……………」  
「だから、まだ頑張るんだ……………」

あの時俺が聞いた…、君の中の約束を守るために…。」

「……………」

## 照らし出される世界

月が沈み始め、園歌ちゃんは再び眠り始めた。

時見くんも落ち着いた…。

あと…、俺ができることは……

……。

「時見くん…、園歌ちゃんが眠っている間…、語りかけてくれないかな……………」

「…語り…かける……………」

「…そう、できれば交代しながら毎日続けて欲しい…」

「…何を…言えばいいんですか…？」

「笑顔になれる話がいいなあ……………」

「…笑顔ですか？」

「幸せになれるなら何でもいいよ…」

「……………」

「…ふふっ、いきなり難しいよね…」

「…大丈夫！今日は俺が話すから……………」

「…先生が、ですか？」

「夜中に病院（びょういん）に来て疲れているでしょ……………」

「時見くんはもう帰って休んだほうがいい…」

「…いいえ！…俺も聞いていきます…！！」

「おっ！いいね〜」

「でも、長いぞ〜？」

「いざとなったら白鳥の隣りで寝ます！……！」

「……お！？」

「……いえ、さすがに怒られます……ね……。」

「……そうだ、話す前にこれを渡しておくね……。」

「これは……？」

「一見、ただの青い箱だけど、よく見るとここに……」

「鍵穴……がありますね……。」

「……それで、この箱を開ける鍵となるのが園歌ちゃんの首元にある

……。」

「……この首飾りなんですか！？」

「……そう、この首飾りはオルゴールが内蔵されている鍵なんだ。」

「……。」

「園歌ちゃんが元気になったら、2人でこの箱の中をあけて欲しいんだ……。」

「……、2人で……？」

「その中には、君の……。」

時見くんが俺に約束した答えが入っている……。」

「……でも俺、君主先生に約束を覚えていないんです…………。」

「……大丈夫。」

「……え？」

「それは君が園歌ちゃんに語りかければ見つけることができるから……。」

「……」

夜明けが始まった…

…アイツも見ているんだよな

この照らし出される…

…青い世界を。

## 照らし出される世界（後書き）

ご拝読ありがとうございました。

続編「Students?

a tale of the

horizon」に続きますので、よろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9939n/>

---

Students?

2011年10月9日16時40分発行